

第二言語習得研究に基づく シラバス・デザインのあり方

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科教授 長友 和彦

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけています。今回のテーマは第二言語習得研究に基づくシラバス・デザインのあり方です。

第二言語習得研究の成果はおびただしい数にのぼり、過去十年間の「第二言語としての日本語の習得研究」に限っただけでも、少なくとも千点を超える論文があります。それらの研究成果は第二言語教育にどのような示唆を与えてくれるのでしょうか。ここでは、言語教育に不可欠なシラバス・デザインに焦点を当て、そのあり方に関して、これまでの第二言語習得研究がどのような示唆を与えてくれるかということを考えてみることにします。

(1) インターフェイスの立場で シラバス・デザインと取り組む

自然で流暢な発話能力には、無意識レベルの知識が不可欠だと言われていますが、意識的に習得した文法知識が、その無意識レベルの知識にもなっていくという考え方をインターフェイスの立場(interface position)と言います。今日では通説となっているこの立場でシラバス・デザインを考えた場合、機能シラバスだけではなく、文法シラバスも重要なシラバスということになり、その両方を組み合わせた統合的シラバス作りを目指すことになります。

(2) 第二言語知識を分類し、それぞれの知識 に対応したシラバスを用意しておく

文法ルールを知っていてもそれが実際に使えるとは限らないということから分かるように、第二言語知識には、知っているだけの知識とそれが実際に使えるようになる知識・能力があります。また、いちいち文法ルールを意識しなくても第二言語が使えるようになることから分かるように、意識できる知識と無意識レベルの知識があることも分かります。これらの知識を組み合わせることで、第二言語知識は(一)知っていて意識できる知識(二)意

識的だけれどもそれが使える知識・能力(三)無意識レベルにある知識(四)それが自然で流暢に使える知識・能力の四種類の知識から成り立っていることが分かるのですが、それぞれが重要な第二言語知識であることから、それぞれの知識の習得をターゲットとした文法シラバスと機能シラバスを用意しておく必要が出てきます。

(3) シラバスはモジュール化する

第二言語習得過程は、一つ一つのルールが積み上げられていく過程ではなく、中間言語(interlanguage)と呼ばれる学習者言語の全体が再構築されていく過程であること、学習者間におおまかな共通した習得過程が見られるものの、個人差が歴然としてあることから、積み上げ方式の画一的なシラバスが破綻することは目に見えていますし、そのことは歴史的にも既に検証済みです。シラバスは、それぞれの学習項目が独立してあって、さまざまなその組み合わせが可能となるようにモジュール化されなくてはなりません。

(4) 統合的シラバスには柔軟性を持たせる

学習者のニーズ、レディネス(現有知識)、学習スタイルという習得要因も考慮して、モジュール・シラバスを組み合わせた統合的シラバスを各学習者に用意する必要があります。しかし、それらの要因は可変的なものなので、統合的シラバスは、変更なり新たな学習項目の付加が可能な柔軟なものでなくてはなりません。

(5) 習得順序研究の成果を活用し、 習得されやすい学習項目から導入する

音声から文法、談話の領域に至るまで、習得順序に関する研究は、日本語の習得研究においても数多くありま

す。その成果を活用する場合、習得順序に添って習得されやすいものから導入し、しだいに習得が困難なものに移行するようにするのが望ましいと思われます。習得が容易なものは、学習者があまり努力しなくても習得されると考えられますが、習得が困難なものはそれなりの努力が必要となり、時間もかかると思われるので、習得を促進するためには、学習者の注意が習得困難なものにより多く向かうようにすべきでしょう。

(6) シラバスを工夫して、文法の意識化、特にコンテキストのある文法の意識化を図れるようにする

文法の意識化は、最近の習得研究の中ではfocus on formと呼ばれてその効果が指摘されていますが、コンテキストから独立させた文法の意識化よりも、学習者と関わりのあるコンテキストの中で、言語形式とその意味と機能に学習者の注意を向けさせるfocus on formの方が、言語習得上の効果は大きいだろうと言われています。

(7) 学習者が自分自身の習得過程も意識化できるよう工夫する

習得過程の意識化とは、文法の意識化と違って、どのように目標言語を（正しく、あるいは誤って）学んで、どのような中間言語（＝学習者言語）を形成しているか、また、その中間言語をどのように（正しく、あるいは誤って）使っているかということ、何らかの方法で学習者に意識化させることです。上のfocus on formの過程でも習得過程の意識化が実現する可能性があります。習得過程の意識化は、換言すれば、学習ストラテジーの意識化ということです。その中には、当然のことながら、習得過程において不可避免的に起こる＋／－の母語転移の意識化も含まれます。

(8) 学習者の自律的努力で文法や習得過程の意識化が可能となるようシラバスを工夫する

文法や習得過程の意識化につながるタイミングのいい誤用訂正など、教師にしかなかできないことも多々あるでしょうが、学習者の自律的努力で可能な意識化はできるだけその努力に任せるようにした方がいいでしょう。例えば、もし、学習者が「学習記録ノート」のようなものに自分の学習状況を記録していき、時々それを読み返すようになれば、それだけでも文法や習得過程の意識化は随分促進され、学習者は次の習得段階へと向かえ

るのではないかと思います。

ここでは、主として教室での言語学習・教育という場面を想定し、そこでの第二言語習得を促進するためのシラバス・デザインのあり方というものを考えてきましたが、当然のことながら、意図的な学習・教育活動を伴わない教室の内外、特に教室の外でのいわゆる自然習得の可能性も念頭において、シラバス・デザインと取り組まなくてはなりません。しかしながら、自然習得の可能性は大きいだろうと言われながらも、何がどこまで自然に習得され得るかという研究は遅々として進んでおらず、具体的な示唆がいろいろ得られるまでには至っていないというのが現状です。

また、実際のシラバス・デザインにおいて、第二言語習得研究の成果だけを頼りにシラバスを完成させることは不可能で、それ以外のところにもシラバス・デザインのリソースを求めなくてはなりません。例えば、誤用分析をそのリソースとして活用し、学習者が未習得と思われる項目を随時シラバスに組み込んでいくという工夫が考えられます。しかし、おそらく最も大きなリソースは、第二言語教師がその経験の中で育んできた知恵や知識だろうと思われます。そのさまざまな知恵や知識を結集させることで、実際のシラバスは完成されていくのではないのでしょうか。

基本的な参考文献

第二言語としての日本語の習得研究を概観した文献

(1)長友和彦 1998

「第4章・第二言語としての日本語の習得研究」『児童心理学の進歩1998年版』金子書房 79 - 110 .

(2)吉岡薫 1999

「第2言語としての日本語の習得研究－現状と課題」『日本語教育』100、19 - 32 .

第二言語習得研究に基づくシラバス・デザインのあり方に関する文献

(1)Ellis, R. 1993. The Structural Syllabus and

Second Language Acquisition. TESOL Quarterly, 27, 91 - 113 .

(2)長友和彦 1999

「第二言語習得研究の成果を活用したシラバス・デザインのあり方」『一九九九年日語教育国際研討論文集』南台技術學院應用日語系 70 - 83 .